

ふるさと再発見 第22回

Re:discovery Omihachiman

県立琵琶湖博物館リニューアル（その2）

色あせない人工素材で 伝統の「勸請縄」を再現



勸請縄の部分の制作風景

近江では、集落に入る道や神社の参道などに、巨大な太い縄が張りわたされていることがあります。一般に「勸請縄」と呼ばれ、近江八幡市域では、このような勸請縄の事例が20件ほど知られています（※）。勸請縄は、メインの太い縄とそこから下がる細い縄、中央の飾りからなり、年のはじめに地区の人びとが作って掛け替えます。災いを防ぎ、おだやかな暮らしを求める思いが込められた、近江ならではの年中行事のひとつです。

滋賀県立琵琶湖博物館では、今月10日のオープンを目指して展示の全面的なリニューアル事業を進めてきました。この勸請縄の再現も、新展示の狙いのひとつです。なるべく原寸に近いサイズの勸請縄を設置し、来館者には縄を実際にくぐってもらおうという趣向です。

実際の祭礼行事に登場する造形物を展示室で再現しようとする場合、大きく分けて2通りの方法があります。一つは実物とまったく同じ材料で作る方法、もう一つは実物に精巧に似せたレプリカを作る方法です。今回は後者を選ぶことにしました。その理由の一つに、材料の問題があります。勸請縄の主素材は大量の稲わらですが、こうした材料の調達は年々難しくなってい

るのが実情です。また長期間展示することを考慮すると、わらは、どうしても虫食いを受けやすいという問題も出てきます。

今回の展示の制作では、安土町内野の勸請縄（内野では「かんじんなわ」と呼ばれています）をモデルにしました。大小の縄と中央の飾りからなり、近江の勸請縄の典型的な形状を伝えていくと考えたためです。

レプリカをつくるといっても、外見を似せるだけではありません。素材が異なるだけで、工程そのものは実物とほぼ同じです。まず主素材である稲わらは、人工素材のロープの一種で再現しました。とはいっても既製品のロープそのままでは、この太い縄をつくることはできません。試行錯誤を経て、一度ばらばらに

ほどいたロープを大量に縫い合わせることになりました。中央の飾りのスギ葉も、そのままでは短期間で色あせてしまうので、もちろん人工素材で表現します。この間、できるだけ実物に近い展示の制作に向けて、内野の皆さんにはさまざまなご協力をいただきました。昨年11月に行われた部品の制作や今年1月3日の勸請縄縫いの本番の機会に、詳しい形状や工程を教わったのははじめ、複雑なつくりの部品はサンプルを一時借用して再現することができました。また中央の木札は、過去に飾られた実物をご提供いただきました（写真）。



まもなくお披露目される新展示室では、勸請縄のほかにも、青々とした樹木や竹の展示が随所にみられます。それぞれに違った方法で、色あせや劣化を防ぐ処置がとられています。展示室では、それらの工夫のあとにもぜひご注目いただきたいと思えます。

（県立琵琶湖博物館 渡部圭一）

※西村泰郎著『勸請縄 個性豊かな村境の魔よけ』（サンライズ出版・2013年）より

！ 新型コロナウイルス関連の情報は、市ホームページをご覧ください

新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、本紙掲載の催しが急に中止や延期になる場合があります。開催の可否は事前に担当課または主催者へご確認ください。また、最新情報は、市のホームページ <https://www.city.omihachiman.lg.jp/> で随時発信しておりますので、ご確認をお願いします。

人口と世帯 令和2年9月1日現在 ()は前月比

総数	82,235人	(+57)
男	40,424人	(+28)
女	41,811人	(+29)
世帯	34,383世帯	(+61)

※外国人住民(41カ国・地域/1,490人)を含みます。